

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 一行と九曜曼荼羅

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-06-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 文雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001728

一行と九曜曼荼羅

田中文雄

一行は実在の唐僧で、密教の經典や儀軌の伝授を示す「傳持の八祖」の第六祖である。俗名は張遂、諡号は大慧禪師、一行禪師あるいは一行阿闍梨と尊称される。弘道元年(六八三年)に生まれ開元十五年(七二七年)十月八日に遷化した。一行は普寂から禪を、悟真から律を学んだ。更に、善无畏と共に『大毘盧遮那成佛神變加持經』七卷を翻訳し、筆者の一行がその内容を解説し『大日經疏』二十卷を著した。

また、一行は天文学者としても名を残す。それまで使用されていた「麟德曆」が日蝕予報に不備があったため、「開元大衍曆」五十二卷を作成した。他にも、一行と係わる曆関係の文献や、翻訳とされる仏典は多い。

しかし、日本では、一行の実像と異なる説話がある。『平家物語』巻二に「一行は玄宗の持僧で、讒言による楊貴妃とのいわれなき浮き名で、果(火)羅国へ流罪となり、最悪の道(暗穴道)を進んだ。七日間暗闇を進む困難な状況を天道は哀れんで九曜を現して照らす。一行は右指を噛み切り、左の袂に九曜のかたちを写した。九曜曼荼羅は、中国の真言の本尊である」といった内容である。

しかし、この説話の登場人物の楊貴妃は、開元七年(七一九年)に生まれ、至徳元載(七五六年)に没したのであるから、一行の没年七二七年にはわずか八歳、「浮き名」が流れる年齢ではない。また、「九曜曼荼羅」は「右の指を食いちぎって写した」などは荒唐無稽な話である。

一行の伝記は『舊唐書』、『宋高僧傳』、『三教源流搜神大全』、『神僧傳』に記述がある。これらの伝記では、仏教經典に通じ、天文曆学に深い造詣を持ち、唐王朝や道士と深く関わっていたことがわかる。しかし、『平家物語』の記述に

近いことは何も見出されない。

密教經典には、星の信仰や儀礼を説くものは多い。しかし、『梵天火羅九曜』は『大正新修大藏經』にしか所収されない。つまり、一行に仮託された疑偽經典であると思われる。

『梵天火羅九曜』（大正藏No.一三二一）では「一行禪師修述。二十八宿在天左轉。數知人觸犯之位。大唐武德元年（六一八年）戊寅。至咸通十五年（八七四年）甲午。都得二百五十七年矣。梵天火羅九曜及暗虛二星。圖在此。但諸星都所在。看之決定。一生吉凶萬不失神妙極」とある。「九曜」とは日・月・火・水・木・金・土の七星に、羅喉（白道と黄道の交点にあたる昇交点）と計都（白道と黄道の交点にあたる降交点）を加えたものである。

本經では羅喉・土星・水星・金星・太陽（密日星）・火星・計都・月天の真言や名称、星の吉凶の記述、各星神の神像が描かれる。更に「北斗七星呪」、「九執呪」、「蝕神」、続いて「葛仙公禮北斗法」、「祿命書」、「吉祥真言」、「火羅圖」と「修法」の記述がある。

各神の真言と神形は、羅喉を例にとれば、「明日。唵囉戸曩阿素（三合）囉邏惹野塞麻捨觀野曩（名位）扇底伽哩莎婆訶」と記述される。その祭祀の方法は、供養には「錢を用いる」、方角は「丑寅」、別名は「羅喉・羅師・黃幡・火曜」と記述される。他の八曜の神も同様に述べられる。

本經は、インドや西方と中国の天文占星術が融合した經典だと考える。七曜や北斗七星は実在の天体であり、中国でも早くから信仰され、占星術に取り入れられた。それにインド天文学の認識（昇交点の羅喉、降交点の計都）が加えられ九曜となる。

真言密教はインド・中国・日本と伝えられ「三国伝燈」とされ、その權威多大であった。そのため、疑偽經典に基づき「九曜曼荼羅」はできあがった。経題に「火羅」が含まれているから、説話や「九曜曼荼羅」信仰に影響を与えたと考察する。



（中国宗教研究）